

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

6&7

JUNE / JULY
2004

CONTENTS

| | |
|-------------------------|-----|
| MCO 第57回&第58回定期演奏会..... | 1~3 |
| ペリオの肖像..... | 4~6 |
| 最近の公演から..... | 6 |
| ネタマ&petite 情報..... | 7 |
| インフォメーション..... | 8 |



写真上・左:準・メルクル、右:小澤征爾
下:水戸室内管弦楽団

次代を担う若きマエストロ準・メルクル、MCO指揮台に初登場。 6/26(土) 27(日)水戸室内管弦楽団第57回定期演奏会

対話重視の指揮者、準・メルクル

水戸室内管弦楽団(MCO)第57回定期演奏会の注目は、何と言っても、人気急上昇中の指揮者、準・メルクルが初めてMCOの指揮台に立つことです。

準・メルクルは、現代ではめずらしく下積みを重ねて育った指揮者と言えます。20代のうちに、ミュンヘンで伝説的指揮者セルジウ・チェリビダッケに学び、タンゲルウッドでレナード・バーンスタインや小澤征爾と知り合った準・メルクルですが、そこからすぐにスター街道をめざすことはしませんでした。あえてヨーロッパの劇場に戻り、練習ピアニストや副指揮者として地道に活動していくことを選んだのです。そうした下積みの末、やがてルツェルンの小さい歌劇場の指揮者となり、ベルン、ダルムシュタット、ザールブリュッケン、マンハイムでも活躍するようになり、その後、シュトゥットガルト歌劇場、バイエルン州立歌劇場、ベルリン州立歌劇場、ウイーン国立歌劇場といった世界でも有数の歌劇場へと登りつめて行きます。2005年9月からは、フランスの名門、リヨン国立管弦楽団の音楽監督という要職に就くことが決まっています。

NHK制作のテレビ番組「マエストロの肖像」(2002年)の中で、準・メルクルは、歌劇場での指揮者の仕事は、制限された状況の下で、いかに音楽、演出、制作を含めた様々な人たちと対話し、良い方向へと導くことが出来るかにかかっている、といった内容のことを語っていました。フル・オーケストラの指揮者には、強烈な自己主張とカリスマ性でグイグイと引っ張っていくようなタイプも少なくありませんが、歌劇場でコツコツと下積みを重ねた準・メルクルはまったく逆のタイプと見えます。

このようなマエストロこそ、まさにMCOが待っていたタイプの指揮者なのです。MCOが目指す音楽の理想的なあり方として「大きな室内楽」が挙げられます。集まったメンバーの個性と技量を尊重し、十分に議論を重ねながら音楽を彫琢していく。長時間にわたってそんな室内乐的なりハーサルを行うMCOのメンバーたちに、対話と協調を重視するマエストロ、準・メルクルは旧知の仲間の如く受け入れられるのではないのでしょうか。

素顔のマエストロ

昨年10月、総楽団長をはじめ私たちスタッフは、来日中の準・メルクルを訪ねました。NHK交響楽団とのリハーサルの直後であるにもかかわらず、マエストロは疲れの表情を一切見せず、にこやかに接してくださいました。

このときの打ち合わせの主な議題は、今回の演奏会のプログラムのことでした。実は、それよりも前にマエストロ側から弦楽合奏主体のプログラム案が挙がっていたのですが、MCO音楽顧問の小澤征爾氏に見せたところ、「せっかく管楽器の名手たちが出るのだから、管楽器が活躍する曲をもっと入れた方が、楽団の特色が出るのでは」

とアドバイスされたのです。

私たちは、小澤征爾氏からの言葉を伝え、さらに楽団の特徴やお客様の好みなどを細かく話しました。私たちの話到最后までじっくりと耳を傾けてくれたマエストロ。しばらく考えた後、静かに口を開きました。「できれば自分が得意とするドイツ・オーストリア系のプログラムとしたい」(すでに前の提案でも挙がっていたヴァーグナー「ジークフリート牧歌」、シェーンベルク「浄夜」に加え、)「ハイドンの交響曲はどうか?」「武満徹さんの曲をアクセントに入れるのも、興味深いかもしれない...」マエストロはプログラムの再考に、快く応じてくれた様子。その後、「ハイドンの交響曲なら何番が好まれるか?」「武満の曲で室内オーケストラの編成で演奏でき、なおかつMCOの過去の定期演奏会で取り上げられていない曲は?」といった細かいやり取りが続き、緻密な話し合いの末、ようやく一夜のプログラムが出来上がりました。

以下、準・メルクル独占インタビューにて、マエストロ自身の言葉でプログラムについても語ってくれましたので、ご一読ください。

《関根》

準・メルクル 独占インタビュー!

マエストロをお引きできて、大変光栄に思っております。まず、はじめて水戸室内管弦楽団を指揮されるにあたってのマエストロのお気持ちをお聞かせください。

メルクル:オーケストラとの初めての出会いは、いつもチャレンジングです。私たちがどのようにコミュニケーションを交わし、音楽の創造につ

いての考えを共有することができるか、という問いが存在します。そして、オーケストラの生きた伝統を発見することは、私にとって興味深いことです。しかし、私は今回のコラボレーションが成功するだろうと強く確信しています。水戸室内管弦楽団は、世界中の音楽家の間で非常に高く評価されていますし、私は音楽顧問の小澤征

爾の指揮により制作されたいくつかのレコーディングを聴く機会を得ました。クオリティが非常に高く、解釈が類例のないほど傑出していることが分かります。ですから、私はこのオーケストラと一緒に仕事できることを本当に楽しみにしていますので。

水戸室内管弦楽団音楽顧問の小澤征爾さんも、当楽団にお招きする指揮者としてマエストロを推薦されました。

メルクル:1984年と1987年、タングルウッドで、私は大変光栄なことに、小澤さんと会い、仕事をしました。そこで、音楽の創造と指揮の芸術についてたくさんのお話を学びました。彼は、私が学ぶ上で最も重要な印象を残しました。2001年に指揮者としてボストン交響楽団を再訪したあと、今度は水戸室内管弦楽団にお招きいただき、大変光栄に思っています。マエストロ小澤に対する私の大きな感謝と賞賛の気持ちは、永遠に変わることはないでしょう。

今回のプログラムに関して、コメントをお願いします。

します。

メルクル:水戸室内管弦楽団が選んだプログラムは、大変難しく、同時に興味深いものです。様式の多様さがあり、オーケストラの技術、技量が強く要求されます。もちろん、日本のオーケストラは武満の音楽を良く知っています。今回は、音の印象と色彩における特筆すべき美しさについて、非常にデリケートで複雑な仕事をします。ハイドンの交響曲は、古典派様式による古典的な傑作で、明晰で、制御され、しかし靈感に満ちたように演奏されるでしょう。ヴァーグナー作品は、彼の妻への誕生日プレゼントというよりは、そのイベントのために書かれた作品です。それは、もちろん、ジークフリート という偉大なオペラへの先駆けを数多く示していますが、ドイツの森、風の息吹、鳥たち、時を超越した時といった自然に関するロマンティックな概念も見せてくれます。時に似ていると感じられますが、違う方向から生まれてきているのがシェーンベルク作品です。とても詩的で、時に印象主義的で、

意味するところと感情において非常に激しく、深いものを持っています。

マエストロは日本という国に対してどのようなお気持ちを抱いていらっしゃいますか？ また、水戸の聴衆に向けてメッセージをお願いします。

メルクル:日本は、自分が存在し、働くために、常に大切な場所であり続けています。私はここで非常にくつろいだ気持ちを抱きます。また、私はドイツの音楽文化の中で生まれ育ってきたので、日本の音楽家や聴衆の方々との私の経験を共有しなければならぬと強く感じています。私は、クラシック音楽だけでなく、日本の文化や芸術からも感銘を受けます。東京でこれまで仕事をしてきた後で、今回水戸にうかがえるのはとても幸福に思えます。水戸について私が知っているのは、非常に歴史があり、重要な場所であるということだけです。オーケストラの方々に出会い、水戸の偉大な文化と美観についてよりたくさん学べますことを、大変喜ばしく思っています。

マエストロ小澤が奏でる、3つの“交響曲” 7/7(水) 7/8(木) 7/9(金) 水戸室内管弦楽団第58回定期演奏会

おかげ様で3日間ともチケット完売となりました。MCO音楽顧問・マエストロ小澤征爾指揮する第58回定期演奏会。チケット発売の熱気がほどよく落ち着いた今、あらためて今回の演奏会の聴きどころに迫ってみたいと思います。キーワードは“交響曲”です。えっ、「今回のプログラムで正式な交響曲は3曲のうち1曲しかないよ」ですって？おっしゃるとおりですが、まあ続く記事をご覧ください。

Symphony #1 未来形

演奏会の1曲目は20世紀ハンガリーの大作作曲家、ベラ・バルトーク(1881~1945)の弦楽器、打楽器、チェレスタのための音楽。バルトークの音楽というとなんとなくコワモテな印象がありますが、そこには熱すぎるほど熱いマジヤール民族の血が流れており、こんなにもわくわくする音楽はそうはありません。

にもかかわらずバルトークの音楽がどうも近づきにくい印象を与えたとしたら、案外それは曲のタイトルのせいかもしれません。バルトークの器楽曲は、(テキストのある曲はもちろん別として)大作になるほど愛想がなくなる傾向にあるからです。思い出してみてください。管弦楽のための協奏曲 弦楽のためのディヴェルティメント 2台のピアノと打楽器のためのソナタ...今回演奏される曲に至っては、弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽です！「音楽」...って、バルトークさん、ほかになにかつけようがなかったのでしょうか。

もちろんこれは、安易な標題をつけて曲を特定のイメージに収斂させてしまうことをよしとしない、「絶対音楽」の使徒バルトークの強固なアティテュードであり、規模の大きな曲になるほどその姿

勢は徹底してくるということなのでしょう。それは逆に言えば、聴き手が音楽から得る印象を束縛しない、ということでもあります。そう考えれば、これはなんと豊かなイメージを喚起してくれる「音楽」でしょうか。神秘的な冒頭のフーガは、バルトーク得意の「夜の音楽」であり、夜の森にひっそりと息づくさまざまな生命の気配がただよみます。その生命が活発に明滅する第2楽章を経て、民俗的な色彩を濃厚にたたえた第3、第4楽章へ...。ぴんと張り詰めた伶俐な響きの弦楽合奏に、チェレスタがほのかな寒色系の色彩を加え、打楽器は静けさと獐犷さの間で無限に変化します。あなたはこの「音楽」からどんな印象を受け取るでしょうか？ちなみに筆者は、唐突かもしれませんが、なぜか 忍者武芸帳 や カムイ外伝 といった白土三平の忍者マンガの傑作群を想起してなりません。忍者という、非情な生の掟に縛られたものたちが知略の限りを尽くし繰り広げる一触即発の生と死のドラマと、バルトークの音楽の、精密でありながら生々しい生命の匂いを感じさせ、生きることのぎりぎりの意味を問う厳しさの間には、どこか共通点があるように思われてならないのです。

閑話休題、タイトルの話に戻りますが、先日雑誌『レコード芸術』5月号の新譜月評を読んでいたらアーノンケールの指揮したこの曲(カップリングは弦楽のためのディヴェルティメント)のCD評が載っており、そこで長木誠司氏が「実質的にはこれらの2曲は交響曲」と書かれていました。なるほど！と膝を打ったことは言うまでもありません。たしかに、管弦楽のための多楽章形式の楽曲であり(この2曲は管を含みませんが)密度の高さといいいしリアスな内容といいい、ことに19世紀以降の

交響曲のイメージに完璧に合致するものでしょう。

ではなぜバルトークは「交響曲」の名を避けたのでしょうか。これは推測でしかないのですが、ベートーヴェン以降、圧倒的な精神の重み、そしてドイツ・オーストリア音楽の伝統の重みを背負う曲種となってしまった「交響曲」に対する、バルトークの抵抗の意志が、そこには込められている気がします。考えてみればバルトークの生まれたハンガリーは長らくオーストリアの支配下にあったわけですし...。そして弦楽器、打楽器、チェレスタのための音楽には、それだけではなくもっと積極的な役割が負わされている気がします。ユニークな楽器編成、そして従来の交響曲にはあまり見られない緩急緩急の古い「教会ソナタ」形式の援用など、この作品は定型化していた交響曲のイメージを打ち破る、新たな未来形の「交響曲」を目指していたのではないのでしょうか。

Symphony #2 - ミッシング・リンク

さて2曲目は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの協奏交響曲 変ホ長調 K.Anh.9 (297b) 協奏交響曲(サンフォニー・コンセルタント)とは18世紀後半にパリを中心に流行した曲種で、複数の独奏楽器がオーケストラをバックに華やかに競いあうというものです。オーケストラ音楽の主役が協奏曲から交響曲へと移行してゆく時期に咲いた華麗なるあだ花、ミッシング・リンクというべきかもしれません。

モーツァルトの協奏交響曲のうち、ヴァイオリンとヴィオラを独奏楽器に立てた曲(K.364)はMCOでも2回定期演奏会のプログラムに取り上げられていますが、4つの管楽器のためのこの曲は初登場です。この曲、実はとても謎めいた作品



写真左から；
工藤重典、宮本文昭、
ダーク・イェンセン、
ラデク・パボラーク

で、現存する楽譜がモーツァルトの手になるものなのかどうか、はっきりしません。モーツァルトは1778年にフルート、オーボエ、ファゴット、ホルンを独奏楽器とする協奏交響曲をパリの音楽会「コンセール・スピリチュエル」のために作曲するのですが、妨害で初演されなかったばかりか、楽譜そのものが紛失してしまうという不運に見舞われます。しかしそれから1世紀近くたった19世紀の中ごろに、この曲の筆写譜と呼ばれるものが突如出現し、以後この譜面が1778年の紛失した協奏交響曲を今に伝えるものとして愛奏されるようになります。ただし独奏楽器はオーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットに変わっており、様式的にも純然たるモーツァルト作品なのか疑問が残る、ということで、他人による編曲があるいは偽作、という疑いが強くなっています。

今回演奏されるのはこの版ではなく、アメリカの音楽学者ロバート・レヴィンがこの版を基にオリジナル編成(フルート、オーボエ、ファゴット、ホルン)へと「復元」した、「レヴィン復元版」によって演奏されます。従来版に比べて響きが大いに変わるのはもちろん、従来版ではオーケストラの提示部の後に4つの管楽器の独奏が登場するのに対し、レヴィン版ではバロック時代のコンチェルト・グロッソのように冒頭から4つの管楽器がオーケストラと共に登場するなど、従来版を聴き慣れた方ほど驚くこと必至。果たしてこれがモーツァルトの「幻のオリジナル」に迫るものなのかどうか、ぜひあなたの耳でお確かめください。従来版で演奏されたカール・ベーム指揮の盤(グラモフォンUCCG - 3499)あたりを聴きこんでみると面白さ倍増でしょう。

独奏者はMCOが誇る管楽器プレイヤー3人(フルートの工藤重典、オーボエの宮本文昭、ファゴットのダーク・イェンセン) 加えてホルン界に登場した怪物奏者、ラデク・パボラーク。1昨年の水戸芸術館友の会主催事業「アフラートゥス・クイント・プラハ演奏会」で同グループのリーダーとして驚異的な腕前を披露したパボラークは、今やベルリン・フィルのソロ奏者として、ソリストとして引っ張りだこの大活躍です。CDもエクストン・レーベルから多数発売しているこの若き巨匠のMCO初登場に、期待がつのります。後述のインタビューもご覧ください。そうそう、ゲストといえば忘れてはいけません。今回の演奏会はオーケストラの中にさりげなく超大物ゲストが参加しています。ヴィオラの川本嘉子、ハープの吉野直子、ピアノの野平一郎などです。誰がどの曲に登場するかも、

お楽しみのひとつです。

Symphony #3 - 古典

そして最後にモーツァルトの 交響曲第40番 短調 K.550。この交響曲史上の古典中の古典については説明不要でしょう。MCO定期演奏会にこの曲が登場するのは、今は亡きシモン・ゴールドベルクが指揮した伝説的な1993年の第13

回演奏会以来です。かくして「交響曲」の三相が楽しめるMCO第58回定期演奏会は、王道の交響曲を最後に鳴り響かせ、華麗にその幕を閉じるのです。

《矢澤》

ラデク・パボラーク Eメール・インタビュー

Q1 . パボラークさん、あなたを水戸室内管弦楽団第58回定期演奏会にお迎えてきて嬉しく思います。パボラークさんは2002年の3月に「アフラートゥス・クイント・プラハ」の一員として水戸芸術館で演奏会を行われていますが、その時のコンサートホールおよび聴衆の印象についてお聞かせください。

パボラーク(以下B):日本のホールで、日本の聴衆を前にして演奏することは、私にとっていつも大きな喜びです。音響は驚くほどいいですし、バックステージ(制作)もすばらしい。私だけでなく、仲間たちも同じように、ほんとうに特別な体験だと思っていますよ。これは、特に水戸について言っているのです。

Q2 . パボラークさんは水戸室内管弦楽団の第2回ヨーロッパ・ツアーの際、ミュンヘンのプリンツレグンテン劇場での演奏を聴いてくださっていますが、水戸室内管弦楽団についてはどのような印象をお持ちですか? また、マエストロ小澤とはすでに共演されたことがあるかと存じますが、マエストロの印象についてもあわせてお聞かせください。

B:MCOは私がかつて聴いた中で、もっともすばらしい室内オーケストラだと思います。ミュンヘンでの演奏会はその最良の例でした。残念ながら、私はカーテンの陰から聴いていたのですが、とはいえマエストロ小澤の姿も見ることができましたが、MCOを指揮しつつ喜びに満ちた表現を行っていました。つまり彼は、ひたすら演奏会を楽しんでいたのです。

Q3 . パボラークさんはホルンのたいへんな名手として日本でも有名であり、数々のCDを聴くと「行くところ可ならざるものはなし」という印象を受けます。パボラークさんにとってのホルンという楽器の難しさと魅力についてお聞かせください。

B:他のどの楽器とも同様に、ホルンを演奏す

ることはたいへんです。ひとつだけ違うとすれば、ヴィルトゥオーソ(超絶技巧)的な楽器として作られてはいない、ということでしょうか。この点、たとえばヴィオラと似ていますね。でもそれは私にはちょうどいいんです。私はホルンの、牧歌的で、ロマン的で、英雄的な響きをほかの何かに変えるつもりはありませんから。

Q4 . 今回パボラークさんがソリストとして演奏されるモーツァルトの協奏交響曲についてお聞きします。パボラークさんはこの曲をもう何度も演奏されたと思いますが、レヴィン復元版は演奏されましたか? もし演奏されたならば、その印象はいかがでしょう。

B:モーツァルトの協奏交響曲は、3回演奏したことがあります。でも復元版はまだですね。

Q5 . パボラークさんは今回、協奏交響曲をソリストとして演奏された後、休憩を挟んで今度はモーツァルト:交響曲第40番をオーケストラの一員として演奏されます。同じ演奏会でソロとオーケストラを両方吹かれるというのはなかなか至難なことと拝察しますが、テクニカルな面と気持ちの面でどのような切り替えが必要なのでしょう。

B:難しいことはありませんよ。もっと複雑な演奏会もあります。ピアノとのリサイタルやロマン派の演奏会のほうがずっとたいへんです。モーツァルトの作品はどれも、深い熟考と、ほほえみを浮かべながらリラックスすることが共に必要です。

Q6 . 最後に、今回のMCOとの初共演を楽しみに待つ水戸の聴衆に向けてメッセージをお願いします。

B:親愛なる聴衆の皆様、(アフラートゥス・クイントの演奏会にご来場の節は)ありがとうございました。素敵な演奏会になりますよう。お楽しみください!!



写真左から; 畠中恵子、木ノ脇道元、菊地秀夫、アルディッティ弦楽四重奏団、木村茉莉、中川賢一

20世紀の巨匠ベリオの音楽には、現代の知性と官能性が両居しています。 6 / 5(土)ベリオの肖像 私がわたしであるために、始原の大地を旅した作曲家

世紀の曲がり角で

21世紀という新しい世紀に突入し、すでに3年が経過しました。新時代の幕開けにあたり、誰もが漠然と抱いた明るい未来というのは、やはり幻想に過ぎなかったことをあらためて感じる今日この頃です。そればかりか昨今の世界情勢に目を向ければ、相変わらず人間同士の殺し合いが続き、これからの時代が明るく輝くものであるどころか、愚を重ねてきた人類の暗黒の時代に逆戻りするのはとさえ思ってしまう。

この絶望が、現代人の叡智に対する絶望とならないように祈りたいです。権力をもつ者たちの理屈だけで世の中が動いていくのではなく、学問的な探求や、直観も含めた思索や、生活の中で培われた知恵などを通して、世界の在り方の理想を描き、その実現のための方策を考える。そうした理想の世界、社会を作るための叡智こそが、これからは、もっとも必要とされていくのではないのでしょうか。

筆者は、こうした文脈の中で、現代芸術を捉えてみたいと考えます。無論、芸術作品自体は、社会での実践の教書とはなりません。しかし、未来の青写真を描くにあたり、最初の第一歩を踏み出すための源泉となり得るのではないかと思います。なぜならば、概ね芸術は、真理や普遍や根源への眼差しをもっているからです。表面的な現実のつじつまを合わせることはばかりに奔走するのではなく、新しい世界を築くためには、こうした根本的な問いかけからはじめるべきだと思います。また、優れた芸術は時代を映す鏡であると言われます。現代という時代がどのような苦悩や矛盾を抱えているのか? 逆にどのような幸福感や希望の光に照らされているのか? それぞれの時代固有の風潮だけに流されないためにも、私たちはどのような時代に生きているのかを把握する必要があるのではないのでしょうか。

ベリオが残した暗号

さて、水戸芸術館では昨年5月に没したイタリアの作曲家、ルチアーノ・ベリオ(1925-2003)を特集する演奏会を開催します。ジョン・ケージ、オリヴィエ・メシアン、武満徹、イアニス・クセナキスなど第二次世界大戦後に活躍した大作曲家たちが次々と他界し、現代音楽のひとつの時代が節目を迎えつつあるのかもしれないという感慨に追

い打ちをかけるように、昨年のベリオの訃報がありました。

前衛作曲家たちは、第二次世界大戦後から1970年代にかけて、「いかに新しい音響を作り出すか」、「伝統的な調性音楽から離れ、いかに新しい音楽の作曲技法を案出するか」というように、「新しさ」に最大の価値を置いて邁進していました。しかし、ベリオはそうした音楽技法の新しさを競うレースからは、常に距離を置き、たとえ新しい音楽技法を用いることがあったとしても、それが最終的な目的となることはなく、自身の探究の道を歩んできたのです。

かつて武満徹さんはベリオとの対談の中で、次のようなことを言っています。「ベリオさんの作品は、非常に綿密な仕掛けによって、非常に多義的な暗号を後世に残していくようなものじゃないかと思うのです。つまり、その暗号は、将来において、色々な人たちによって、様々な形で読み解かれていく可能性に満ちている……」

音楽技法という作曲上のテクニクの論争を超えて(この問題が最初にありきという風潮が、現代音楽がごく限定された聴衆にしか受け入れられなかった最大の理由でしょう)、ベリオは作品の中に、さまざまなメッセージをこめました。武満さんが言うところのベリオが残した暗号のひとつの解読の試みを、今回水戸で、聴衆の皆さんと一緒に行ってみたいと思っています。きっとその暗号の中に、冒頭に述べた、世界(社会)や人間のあるべき姿を考えるためのヒントが隠されているのではないかと考えます。

今回はナビゲーターとして、現代作品の考察では、まさにわが国の知性の一翼を担う音楽学者・音楽評論家の白石美雪さんをお招きしています。演奏会では、ベリオの音楽を白石さんの解説をさみながら鑑賞していただきます。

美しく、官能的に響く音楽

ところで、ここまで拙文にお付き合いくださっている読者の皆様の中には、もしかしたら、「なんだかシリアスで難しいコンサートになりそうで、肩が凝りそうだなあ」という印象をもたれた方もいらっしゃるかもしれません。しかし、そんな心配はご無用です。なぜならベリオの音楽は、現代作品としては他に類をみないほど美しい響きにあふれているのです。このことは、豊沃な歌の伝統をもつ

イタリアの先祖伝来の血をベリオは受け継いでいるからだと言えるのかもしれませんが。

また、ベリオの音楽の特質は、ときに「官能性」ということばで表されることもあります。その代表的な言説のひとつにイタリアの思想家・作家のウンベルト・エーコの次のようなものがあります。「……もし同じ生の感覚、生に対する同じ貪欲さをもつイタリアの音楽家を他に探すことになれば、私はロッシェニを思い浮かべるでしょう。ベリオは本当に美食家ですが、それは料理に関してという意味ではなく、生に対してなのです。これと同じ官能性は、彼の音響素材の好み、彼が創作できる音楽の大饗宴の嗜好にあらわれています。肉体の官能性に対する非常に鋭い感覚は、ベリオの個性を形作る重要な要素なのです……」ベリオの音楽は、私たちの肉体に直接語りかけてくるのです。

こうしたことから今回の公演は、ただひたすらベリオの音楽に耳を傾けるというだけでも、十分にお楽しみいただけるということが、お分かりいただけたのではないのでしょうか? 「なんだか難しそう……」と尻込みされる必要はまったくありません。どうぞお気軽にお越しください。

出演者その1 カルテットの大御所

登場する演奏家にもご注目ください。現代作品をレパートリーとする弦楽四重奏団といえば世界でも屈指のアルディッティ弦楽四重奏団が、今回のプロジェクトに参加してくれました。アルディッティ弦楽四重奏団は、世界中の現代作曲家から信頼を得ているのですが、ベリオとも親交がありました。両者の共同作業の輝かしい成果のひとつは、ベリオの4つの弦楽四重奏曲を収録したアルディッティ弦楽四重奏団のCD(MO 782155)に結実しています。また、ロンドンで今年の4月15日から30日まで、驚くことに2週間以上にもわたるベリオの大追悼企画が催されていたのですが、彼らはこの公演の中でもベリオ作品の演奏を行っています。さらに、今回の演奏会の最後に取り上げられる超絶技巧を要するセクエンツァXIVは、他ならぬアルディッティ弦楽四重奏団のチェリスト、ロハン・デ・サラムに献呈された作品なのです。なお、水戸芸術館では2000年に演奏会を行っており、今回はそれ以来の2度目の登場となります。

出演者その2 わが国の俊英たち

アルディッティ弦楽四重奏団という「大御所」に

写真左から;
『フィネガンズ・ウェイク』 『ユリシーズ』
ジェイムズ・ジョイス 著 柳瀬尚紀 訳
(河出書房新社)



加え、今回の演奏会には、現代作品演奏に新風を巻き込んでいる、わが国の「若き俊英」が登場します。

ベリオの音楽でとりわけ重要なもののひとつが声を用いた作品ですが、その演奏に欠かすことが出来なかったのが、ベリオの最初の夫人で、あらゆる声を駆使する天才歌手キャシー・パーベリアンです。今回出演する畠中恵子さん(ソプラノ)は、学生時代、このパーベリアンの存在を知り、現代声楽曲への専心を決意したそうです。それだけに畠中さんにとってベリオ作品は、活動の核心とも呼べそうな大切なレパートリーのひとつなのです。事実、今回の演奏曲 セクエンツァ III を収録したCDを2枚(TRG-002、004)もリリースしています。

次に紹介する3人は、アンサンブル・ノマドのメンバーで、今年2月に水戸芸術館で行われた池辺晋一郎さん企画の「現代音楽を楽しもうXVII」の演奏会にも出演し、聴衆をおおいに鼓舞させた演奏家たちです。エネルギーあふれる演奏で、老若男女を問わず多くの人たちを現代音楽の虜にしていくのが、中川賢一さん(指揮、ピアノ)です。現代フルートの演奏家として彗星のごとく楽壇に登場し、今日大きな注目を浴びているのが、木ノ脇道元さんです。そして、かつてはベリオも訪れた戦後の現代音楽の中心的な役割を果たしているダラムシュタット国際現代音楽夏期講習に参加、その才能が認められシュティベンディエン賞を与えられ、後に同音楽祭に招待されるという経歴の持ち主が菊地秀夫さん(クラリネット)です。

また、木村茉莉さん(ハープ)は、1970年代から今日まで、わが国の現代音楽を演奏面から支えてきた立役者のひとり、武満さんが企画した「ミュージック・トゥデイ」のシリーズなどにも参加しています。

プログラム

コンサートでお聴きいただくプログラムは、ベリオの創作の軌跡を見渡したいという意図から、本格的な作曲を開始した1950年代の作品から、他界する直前の作品まで、各年代を網羅する構成となっています。

「多義的な暗号」と武満さんが語ったベリオの音楽の全貌を、限られた言葉で言い尽くすことは難しいのですが、ここでは、当日のプログラムについて、ベリオを読み解くためのいくつかのキーワードとともにご紹介していきたいと思ひます。

【声(言葉と音楽)】

「……声に関するものすべてが私の興味をひきま

す。生の声でも、マイクの声でもです。話し方、響き、裏声、鼻声、胸声、それにどう言ったらいいのかわ、子宮の声もそうなんです……」とベリオ自身が語るように、ベリオの作品の中で声は非常に重要なテーマでした。ベリオが作品の中で用いた声は、伝統的な声楽の中で扱われてきた歌詞をメロディーやリズムにのせて歌うための声とは、ずいぶん様相の異なるものです。今回の演奏曲 セクエンツァ III (1966)と オー・キング (1968)が、この声を扱った作品に該当するのですが、どちらの作品も、声は意味をもつ言葉(歌詞)を伝えるために発せられるというよりは、声の音響的な側面に光があてられています。セクエンツァ III は日常生活で聴こえてきそうな笑い声のさまざまなヴァリエーションから構成されています。また、オー・キング は、アメリカの黒人解放の指導者マーティン・ルサー・キング牧師が銃弾に倒れたことを契機に書かれた作品で、曲の大半は「オー・マーティン・ルサー・キング」という言葉の母音を抽出した音素が歌われます。ベリオはこのように、意味を担われた言葉を伝えるための道具としての声ではなく、生きていることの証しとも呼べそうな根源的な声を音楽の中で表そうとしたのです。

【身体性】

ベリオの根源的なものへの眼差しは、声が発せられる源である身体そのものへも向けられました。1997年に書かれた弦楽四重奏曲 グロスは、そのタイトル自体が「音楽的な身振り」という意味合いをもつ言葉です。机上の空論ではないけれど、頭でっかちなだけで物事を追求するのではなく、身体的なレベルに立ち戻ろうとベリオはしていたのです。

【電子音楽】

ベリオは「声」や「身体性」といった根源的な世界を志向する一方で、コンピューターや音声学、音響学などの最新の科学の成果を積極的に自作に取り込んでいきました。そうしたベリオの試みを代表するもののひとつが「電子音楽」です。今でこそシンセサイザーの普及などにより電子音楽は、ポピュラー音楽も含め当たり前のように私たちの日常の中にあるのですが、ベリオは50年代にミラノの電子音楽スタジオを創設するなどして、その創成期に役割を果たしたのです。今回演奏される差異 (1959)は、フルート、クラリネット、ヴァイオリン、チェロ、ハープの5つの楽器と、事前にこれらの楽器によって演奏・録音され、若干の電子的な変調が行われたテープ音楽が交錯する作品です。また、演奏会に先立って当日の16:10から上演さ

れるベリオの 顔 (1961)という作品は、純粋なテープ作品で、キャシー・パーベリアンによるうめき声、笑い声、泣き声、叫び声、意味を持たない擬似言語によるおしゃべりの声などが、ホワイト・ノイズと組み合わせられています。この作品は当初イタリアのラジオ放送のために書かれたのですが、倫理的問題から放送禁止となった問題作です。スキヤングラスで生々しいパーベリアンの声と電子音響の織り地がどのような世界を見せてくれるのか? どうぞご期待ください。

【引用(カラーージュ)】

今回の演奏会では、オーケストラ作品なので残念ながら取り上げられなかったのですが、ベリオの創作の転機となった重要な作品に シンフォニア (1968/69)があります。本作品の第3部は、マーラーの交響曲 第2番「復活」の第3楽章の旋律をはじめ、パッサ、ブラムス、ベルリオーズ、ドビュッシー、ラヴェル、シェーンベルク、ベルク、シュトックハウゼンなど古今東西のさまざまな音楽の断片が積み重なって構成された、壮大なカラーージュ作品なのです。この音楽を前にして思うことは、既存の作品からの引用ばかりなのだから、これはベリオのオリジナル作品と言えるのだろうか? ということです。この作品を通して、ベリオは現代人のアイデンティティーの問題に言及しているのではないのでしょうか。また、わたしたち人間にとって、真のオリジナリティーや何事にもとらわれない純粋で自由な自分というのは幻想で、あくまでこの身は、文化的・社会的な背景というもの無くしては存在し得ないという読み解きができるかもしれません。演奏会では可憐なピアノ曲が4曲取り上げられますが、その中の 水の鍵盤 (1965)は、ブラムスの 3つのインテルメッツォ作品 117 の第2曲とシューベルトの 4つの即興曲 D.935 の第1曲のモチーフ(動機)が組み合わされた作品です。

【work in progress(進行中の作品)】

「わたしは名人芸にあらん限りの敬意をいいたい」と語るベリオが、現代楽器の可能性をとことんまで追求した一連のシリーズが「セクエンツァ」と呼ばれる作品群です。今回の演奏会では、先にご紹介しました 女声のためのセクエンツァ III と同シリーズの最後となってしまった チェロのためのセクエンツァ XIV が取り上げられます。ところで、ベリオは セクエンツァ シリーズに加え、道 というタイトルをもつ作品シリーズも書いています。実は、セクエンツァ と 道 は類縁関係にあり、ベリオは「(道 という作品は) セクエンツ

アの中に概念的に含まれていたひとつのラインを取り出し、もっともっと透明なものに純化していくことで生まれたものです。」と語っています。具体例を挙げますと、ハーブのためのセクエンツァII(1963)に基づきハーブとオーケストラのための道I(1964年)が作られ、ヴィオラのためのセクエンツァVI(1967)に基づきヴィオラと9楽器のための道II(1967年)が作られました。(ちなみに道シリーズの中だけみても、たとえば道IIに基づいて、道III(1968)が書かれるということもありました。)こうしてセクエンツァと道の関係などを通してベリオは、音楽作品はそれ自体完結したものであるという従来の考え方から脱却し、「進行中の作品」としてどんどん変容していくような音楽作品のあり方を提示したのです。

【言葉ではなく音楽で...】

今回の演奏会のクライマックスとして奏されるのが弦楽四重奏曲 夜想曲です。この作品の副題として、スコアの冒頭にベリオは、ポール・セランの次の詩の断片を引用しています。「夜に黙して語られなかったことばを」。言葉ではなく、音楽だからこそ表すことのできるものが、きっとあるのだと思います。本公演は、拙稿の冒頭に

も書かせていただいたように、来るべき未来を考えるためのヒントとなれば、またチラシなどに書いた自分探しの旅の道標となれば、という思いからこの公演を企画しました。言葉では掬いきれない何か、身体という始原の大地を震わす何かを、ベ

リオの音楽を通じて見つけることができればと考えます。知的な興味をお持ちの方にも、体いっばいに音楽を受け止めたい方にも、きっとお楽しみいただける公演になると思いますので、どうぞコンサート・ホールに足をお運びください。《中村》

柳瀬尚紀さん、白石美雪さんとエンジョイス!
講演会「ベリオが影響を受けた作家たち ジョイス・ベケットが描く現代の人間像」

コンサートに先立ち、17時より講演会を実施します。講演会のテーマは、ジェームズ・ジョイスとサミュエル・ベケットという2人の作家についてです。どちらの作家も20世紀に作られた文学を知る上で、避けて通ることなど絶対にできない巨匠とされているのですが、わが国では、彼らの作品は、残念ながらあまり知られていないのではと考えます。実は、ベリオの音楽には、これらの作家たちとのかかわりがとても深く、このことについては当日、白石さんに詳しくお話しいただく予定ですが、たとえば先ほどの「進行中の作品」の本家はジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』ですし、ベリオのコーラージュ作品

シンフォニア で使われているテキストはベケットの『名づけ得ぬもの』なのです。講演会では、英文学者の柳瀬尚紀さんにジョイス、ベケットについてお話しいただきます。『vivo』読者の中には、ジョイス譲りの軽妙で言葉の含蓄(つまり洒落)が冴え渡る、『レコード芸術』(音楽之友社刊)で柳瀬さんが現在連載中の「音盤猫素義エンジョイス」をご存知の方もいらっしゃるでしょう。当日は、きっとジョイスなどの話題で盛り上がる「エンジョイス」で「音楽^{おとたの}しい」(どちらも柳瀬さんの造語です)公演となると思います。是非、講演会もご期待ください。



最近の公演から
APRIL



1



2



3



4

ファジル・サイ ピアノ・リサイタル
PIANISM / SAY -ISM(4月18日)
THE MAN FROM TURKEY、コンサートホールを席卷! ファジル・サイは熱狂的なプレイで客席を翻弄し、興奮の渦にたたきこんだ。1曲目がハイドン:ピアノ・ソナタ 八長調 Hob. - 35に変更となったが、これは本人からの強い希望であり、実際ハイドンのさりげないはじまりは、スカルラッチェ以上に続く2曲とのスムーズなつながりを実現したと思う。彼の「音楽」そのものがいかに聴衆の心と反応したかは、以下ご覧ください。MIDIピアノを使用した 春の祭典 の壮絶な演奏の後に、アンコールはなんと自作中心に5曲!《矢澤》アンケートから ピアノという楽器の魅力をあそこまで引き出した人を見たのは初めて(那珂町:Y.T.さん) 特にシャコンヌは(中略)私にとって一生の宝物となりました(水戸市:K.G.さん) 負けましたよ(M.N.さん) ぶっつんだ演奏で仰天(水戸市:T.N.さん) 正統派のクラシックファンにはどのように聴こえたのだろう? 私は興味深く楽しく聴かせていただいたが(土浦市:Hさん) ピアノとの格闘技(無記名の方) ハイドン、モーツァルトのソナタはこんな表現もあるんだ!(牛久市:N.M.さん) 春の祭典はサイが2人に見えた(無記名の方) 水戸芸のコンサートの中で1、2番目のインパクト(Tさん) 鍵盤だけでなく、空気も弾く男(水戸市:S.E.さん) 全身音楽家、偉サイ、奇サイにバンサイ!(水戸市:M2さん)

近藤 良と仲間たち
(4月25日)
鹿嶋を中心に活躍するクラリネット奏者、近藤 良さんの芸術館での初リサイタル。ドイツ・シャルブラッテンレーベルからCDも発売し活躍中の近藤さんは、ヴィオラの百武由紀さん、ピアノの白澤暁子さんという気心の知れた仲間たちとの親密なアンサンブルを聞かせてくれた。モーツァルトのケーゲルシュタットトリオはともかく、グリーンカとライネッケの2作品は比較的珍しいレパートリー(だがどちらも佳曲!)で、芸術館でも演奏されるのはこれが初めて。白澤さんが芸術館のベーゼンドルファー・セミコンサートグランドピアノ(「ヴァリエーションズ」シリーズなどで登場)を選んだのもこのアンサンブルにはぴったりで、柔らかな室内楽の 때가 芸術館に流れた。アンコールはベートーヴェン 街の歌 とシューマン トロイメライ。《矢澤》アンケートから それぞれの楽器の音色のとけ合う音楽を最後まで楽しむことができました(ひたちなか市:C.K.さん) いやされました。肩の力が抜けほっとします(無記名の方) 今日のお天気といい、この演奏会といい、とても満ち足りた日でした(K.N.さん) 豊潤な音色に心から感動しました(水戸市:E.S.さん)

1~2. ファジル・サイ ピアノ・リサイタル 3~4. 近藤 良と仲間たち



* nettama=ネットワークする猫。タマ。
芸術館のコンサートをサカナに
いるなどところへnettamaします。

K.Anh.9(297B)=

K³.297b(Anh.C14.01)???

のっけから暗号を登場させて恐縮です。これはモーツァルト・ファンの読者の方が見れば「ああ、あれね」と一目瞭然だろうけど、そうでなければいったいなんだかよくわからない記号だよね。僕もそんなに詳しいわけじゃないから、解説？するのに時間がかかった。イコールで結ばれた2つの記号はどちらも、モーツァルトの(ほぼ)同じ作品を指す整理番号なんだ。ただしこの(ほぼ)というところがミソで、クエスチョンマークをつけているのは、そのためでもある。

イコールの左側は、MCO 第58回定期演奏会の曲目 協奏交響曲 変ホ長調 にくっついてくる記号だから、きっとちらしなどでご覧になられていると思う。Kは19世紀のモーツァルト研究家、ルートヴィヒ・フォン・ケツヘルがモーツァルトの(当時残されていた)全作品を整理するためにつけた整理番号だ。これは作曲年代順に整理されており、K.626、つまり未完の絶筆 レクイエム で終わっている。これは、モーツァルト好きならケツヘル番号で作品をそらんじられるくらい浸透し、その後のモーツァルト研究の重要な基礎になった。ケツヘルはアマチュアの研究者だったそうだ。たい

した人だね。

とはいえその後研究が進むにつれて、ものによってはケツヘルが整理した番号とは違う順番で作曲されたことがわかったり、作品の真作性が疑われたり、要するに新しい情報がいっぱいできて番号を直す必要が出てきた。改訂を重ねてきたケツヘル番号は、現在第6版まで達している。ただ従来慣れ親しんでいた番号が急に変わると混乱するから、補足的な表記をいろいろ加えたりする。それで上記のようなややこしいことになるというわけだ。

ちなみに左側の表記を解説すると(ここからはMCO58回定期の 協奏交響曲 に関する記事を読んでからお読みください)、KのあとのAnhはドイツ語のAnhang、つまり「補遺」や「付録」を意味する。この曲は紛失作品なので「補遺」「付録」としての整理番号を与えられたわけだ。ただし19世紀中ごろにこの曲のものという筆写譜が発見されたので、ケツヘル第3版で「真作」に昇格した。それがカッコの中の記号297bだ。ところがその後の研究でこの筆写譜は疑わしいぞということになり、クエスチョンマークが付されることになった。それがイコールの右側の最新の表記だ。つまり「K³.297b」は「ケツヘル第3版では297bで分類された作品だよ、

「(Anh.C14.01)」は「でもわれわれケツヘル最新第6版ではこの筆写譜を偽作もしくは疑わしい作品とします」という意味になる。ややこしいがシステムとしては明快だ。ところがだ、もうひとつ重要なのは、K.Anh.9(297B)も番号として無効になったわけではないということ。つまりこの番号は、K³.297b(Anh.C14.01)が「偽作」ならば依然として「行方知れず」ということになる。協奏交響曲 変ホ長調 を意味するようになった、というわけだ。だから最初に言ったように、現在、このふたつの記号は必ずしもイコールとはいえない、という判断になる。

ここまで読んで、今回演奏される「レヴィン復元版」がなぜK³.297b(Anh.C14.01)でなくK.Anh.9(297B)の番号をとるか、おわかりになられたかと思う。つまりレヴィンは、自分の校訂した版は怪しい「偽作」ではなく、紛失したオリジナルを復元したもののなのですよ、と言いたいわけなんだね。

ふう、やっと解説終了。モーツァルティアンの方、これで正しいでしょうか？ おかしい部分があったら、どうか指摘ください(珍しく不安気なタマであります)。しかし作品の整理番号って、いろんなドラマが眠ってるものだね。これすなわち、研究者の方々の努力の軌跡であるともいえる。次号でもう少し追求してみようかな(こわごわ)？



プチ情報 速 達

ファンファーレ・チョコリニア関連企画・映画上映のご案内：諸方面で「なんじゃい、このちらしは！」と反響を呼んでおります8月27日の演奏会「ファンファーレ・チョコリニア 東欧吹奏楽団」。このスーパー・ジプシー・プラスの紹介は次号じっくりさせていただくとして、今号ではチラシ裏面に書かれている、6月12日(土)18:30より行なわれる関連映画上映企画(共催：NPO法人シネマパンチ)のご案内を、『炎のジプシー・プラス～地図にない村から』というこの映画、東欧の寒村から登場したファンファーレ・チョコリニアがいかにして世界を股にかけるスーパー・グループとなったかを丹念に追ったドキュメンタリー映画です。その爆発的な演奏や熱狂する聴衆の姿はもちろん(日本公演の様子もあり)、彼らの故郷ゼチェ・ブレイ二村の美しい自然や、リアルな生活の様子など、貴重な映像がたくさん。これを観てから演奏会を聴けば、楽しさ倍増うけ合いです。しかもこれが日本初の劇場公開。夏には東京で単館ロードショウの予定ですが、ロードショウ料金なら当日1,800円のところ今回の特別上映は半額近い1,000円でご提供します。「チョコリニアどうしようかな」と迷っていらっしゃる方、まずこの映画で「おためし」はいかがでしょうか。さらに8月27日の演奏会チケットと一緒に購入すればなんと800円という名画座価格！ぜひこの機会をお見逃しなく。お問い合わせは芸術館チケットセンターへどうぞ。

演奏会プログラム・バックナンバー発売開始！「行き損なってしまったけれど、あの演奏会のプログラムがほしい」「もう1部余分にプログラムがほしい」...演奏会終了後、しばしばこんなお問い合わせを受けます。たまたま残部があったときにはお渡しできることもあるのですが、基本的には保存用最低限の部数しかないで、「ごめんなさい！2階の閲覧コーナーをご利用ください」とお答えしなければならないこともしばしば。そこで、今後残部を出せるものはバックナンバーとしてミュージアムショップ「コントロールポアン」で販売することにいたしました。原則的にMCO定期演奏会は200円、それ以外のものは100円で販売いたします。販売、という形をとるのは恐縮ですが、管理手数料としてご協力いただければと思います。従来からの、演奏会にいらっしゃるお客様への無料配布は変わりありません！とりあえず2002年度の演奏会からバックナンバーを取り扱いを行ないます(残部状況を見てもう少し前のものも出せるかどうか検討中です)。ただしセミナー等の簡易プログラム、「茨城県在住の演奏家による演奏会企画シリーズ」(残部は保存用を除いて企画者の方にお渡ししています) など取り扱いできないものもございますのでご容赦ください。お問い合わせはコントロールポアンまで(TEL029-227-0492)。

ATMアンサンブルメンバーのヴァイオリニスト、小林美恵が水戸市内の「佐川文庫」にて6月12日リサイタルを行ないます。お問い合わせはTEL029-309-5020まで。

